（別紙様式）

令和５年度かながわ学びづくり実践研究推進校　実践報告

綾瀬市立北の台中学校

研究テーマ：「主体的・創造的に生きる生徒の育成」
～一人ひとりの「わかった・できた」を深い学びへつなげる授業づくり～

１　実践の目的

中学校学習指導要領に明記された「主体的・対話的で深い学び」の実現をめざし、生徒が「わかった・できた」と感動を味わうことができる授業を展開していくことが大切である。主体的に学ぶ姿勢を育むことが、生涯学び続けていくためには最も重要であり、また、そこで立ちはだかる様々な問題を協働して解決するための方法を創造する力こそが、これからの未来を生きる子どもに求められている資質能力だと考え、研究主題を「主体的・創造的に生きる生徒の育成」、副題を～一人ひとりの「わかった・できた」を深い学びへつなげる授業づくり～と設定した。

２　実践の内容

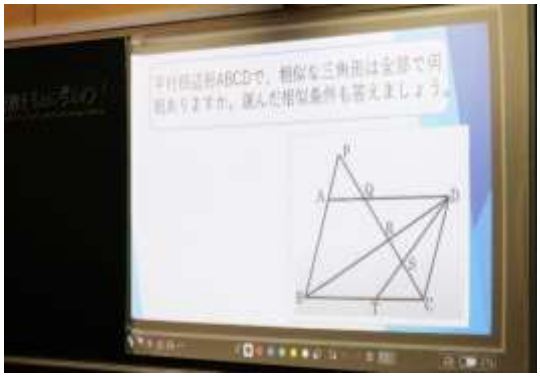
（１）研究の仮設

一人ひとりがそれぞれの「わかった・できた」を実感することによって、次の学ぶ意欲につながる。意欲や思い、考えを持ち、深い学びにつなげることで、主体的、創造的に生きる生徒の育成を図ることができるのではないか。

（２）研究の手立て

①授業の初めに単元・目標・流れを把握

授業の見通しがはっきりすることによって、子どもの安心につながり、集中して取り組むことができる。



②子どもの考えや努力の過程が見えるノートやワークシート

ワークシートはできるだけ指示を少なくし、子どもがメモをとったり、自分や周りの考えを書いたり、自由に表現することで創造力の育成につながる。

③生徒が主役となる学習活動の工夫

学び合いを行うことによって、人とのつながりを楽しむ力の育成、また、互いに認めあうことで自己肯定感の高まりにもつながる。

（３）研究の取り組み

①研究の手立てを意識し、主語を生徒として、学びあいを取り入れた授業を積極的に行い、共有体験の機会を増やすことで基本的自尊感情を高める。

②全教職員が授業を公開し、１学年、２学年、３学年の３つのチームに分かれて授業研究を進める。

③年間を通して２回の生徒アンケートを実施し、研究の成果を検証する。またアンケートの結果を生徒自身に返す機会を設ける。

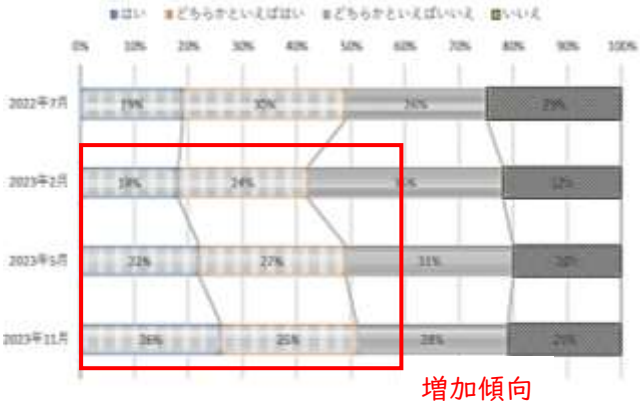
３　実践の成果

筑波大学教授、桜井茂男先生の『学習意欲』が育つプロセスモデルの考え方を元に、生徒アンケートを年間通して２回行った。アンケートの回答には四件法（①はい②どちらかといえばはい③どちらかといえばいいえ④いいえ）を用いた。アンケートの回答率は各回８５％程度の生徒が回答しており、長期欠席の生徒を除けば、学校全体の様子を読み取るためには十分な数の回答数があったと思われる。アンケート結果の考察とまとめは次のとおりである。

（１）考察１

達成感や充実感を得るために、自らやり遂げようとする姿勢が高まっている傾向にある。今後も最後まで諦めずに課題に取り組む粘り強さをもった生徒を育てていきたい。

○難しい問題でも、簡単には先生や友達の助けは求めない。

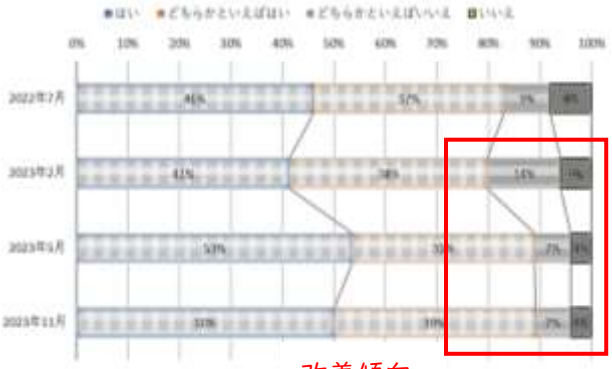


増加傾向

（２）考察２

昨年度に比べ、生徒が「わかった・できた」と実感する機会が多くなっており、主体的な学習意欲の高まりがみられた。

○授業で「わかった・できた」とよく思うことがある。

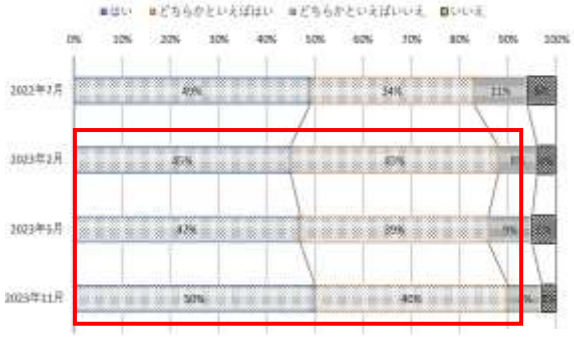


改善傾向

（３）考察３

協働的な学習に対して、2023 年 11 月の時点で 90％の生徒が肯定的にとらえている。学びあいの機会を大切にし、職員が一丸となって研究した成果と言えるのではないかと考える。

○授業では友達に教えたり、教わったりすることが多い。



増加傾向

（４）成果のまとめ

①一人ひとりが「わかった・できた」を実感することによって、主体的な学習行動の促進につながる。

②協働的な学びあいを取り入れることで、生徒が人とのつながりを楽しみ、考えを広げることができた。

４　今後の展開

（１）より深い学びへの実現に向けて、生徒の挑戦行動を促すためにどうしたらよいか。

あたえられた課題に対しては、積極的に取り組む姿が見られたが、そこからさらに新しい課題や疑問を見いだす生徒は少ないように思えた。改善するためには、一つの正解に向かうだけでなく、様々な見方・考え方が出てくるような魅力ある課題設定や、単元を貫く問いが必要だと考える。

（２）間違いや失敗することに抵抗があり、ありのままの自分を認めるためにはどうしたらよいか。

学習に対して一生懸命に取り組む生徒が多いからこそ、結果を求めてしまい、定期テストなどの点数が低いと自信をなくしてしまう生徒が多い。そのようなときに、褒められると社会的自尊感情は高まるが、基本的自尊感情は育まれない。結果だけでなく、生徒一人ひとりの取り組みの過程を認め、自己受容感を高めるような機会を増やしていきたい。